

明石浦のおしゃたか舟

7月21日、岩屋神社(明石市材木町)に伝わる伝統行事で明石市指定無形民俗文化財(昭和49年指定)の「おしゃたか舟神事」が、岩屋神社と明石港などで行われました。

「おしゃたか」というのは、「おじゃったかなあ」という明石の方言で、「神がおいでになったか」という意味の言葉です。櫓と御幣をつけた全長1.5mほどの「おしゃたか舟」を若者たちが海上で立ち泳ぎをしながら、「おしゃたか」「おしゃたか」と唱え、前へ前へ放りながら進んでいきます。明石浦の前浜六人衆が、淡路の岩屋に鎮座する神をこの地にお迎えし、海難防止と豊漁を祈ったという漁民の生活の一端を如実に表した特色あるもので、海峡の町明石の夏の風物詩として有名です。

旧暦の6月15日にあたる日(昭和60年より7月の第3日曜日)に開催され、昔は淡路まで渡っていたが、現在は明石港を出たところまで泳ぎ、そこで伴船に引き上げられ、松江海岸沖に移動し神事を終えて、再び明石港に戻ってきます。

○起源(岩屋神社説明板による)

成務天皇13年(143年)6月15日の勅命により、当浜の名主(前浜六人衆)が新舟を造り、一族郎党を引き連れ淡路島に渡った。御祭神を舟に遷し帰路についたところ途中、明石海峡の潮の流れが速いため、舟をこの浜(前浜、明石浦)に着けることができず、西方の松江海岸沖の赤石(あかいし)の所で一夜を過ごした。この時にお供えしたのが、特殊神饌と言われ、ハマチなどの出世魚・精白した麦にハッタイ粉をまぶしたもの・ヤマモモ・白酒などの当地の産物であり、現在も供えている。神社の境内では以上の説明の放送が流れている。 ※赤石(「明石」の起源ともいわれる沖に沈んでいる岩、血で赤くなった鹿がそのまま岩になった伝説がある。昔は見え隠れしたという)

○行事の流れ

宵宮(前日)の朝、神職・六人衆による禊(みそぎ)が明石港から3kmほど西の松江海岸で行われる。精進潔斎の後に行事で持ち歩き御旅所でも使う「茅の輪」2つの調整が行われる。

本宮(当日)、10:00岩屋神社本殿、拝殿で神事が始まる。拝殿の外に並べられた「おしゃたか舟」(子ども用も含む)のお祓いを終えた後、宮司を先頭に、猿田彦(鼻高面)、六人衆(素襖に侍烏帽子姿)、氏子総代(陣羽織に立烏帽子白鉢巻姿)、おしゃたか舟を担いだ明石浦漁協の青年達が厄除けの「茅の輪」をくぐり、太鼓を先導に、列をなして約500m南の浜(御旅所)へ進む。子ども用のおしゃたか舟を担いだ子どもの周りにはその家族も一緒に歩く(昔は子どもの舟はなかったが伝統文化継承の動きから近年始まっている)。

10:40頃、御旅所に並べられた「おしゃたか舟」のお祓いをした後、2列になり参加者が「茅の輪」をくぐり、餅まきが行われ、歓声に包まれる。その後、港に停泊している大漁旗を掲げた7隻の漁船、一番船には宮司、会長、猿田彦、六人衆の一部が乗り込み、その他には六人衆、氏子総代が分かれて乗り込む。

11:00頃、赤鉢巻を首にかけた禪(ふんどし)姿の青年達が、岸壁に並び、神主の浄め後、「おしゃたか舟」を次々に海へ投げ入れ、海に飛び込む。今年は10人の青年達とその役割を担った(別の記録では8人、9人の時もある)。穏やかな港の中を、舟を投げながら前へ進め、港の外へ出たところで、大漁旗を掲げた漁船に引き上げられ、漁船7隻は海上神事(宝剣等を海に沈める)を行う松江海岸付近の「赤石」へ向かう。賑わいが去った港には泳ぎ手の安全を守るためにともに泳いでいた潜水係りが陸に上がってくる。

海上神事を終えた7隻は海上を早いスピードで飛ばし、12:00頃、明石港に戻ってくる。御旅所に「おしゃたか舟」を並べお祓いを行う。その後、主に氏子総代が舟を持ち、六人衆などもそれぞれに岩屋神社をめざす。拝殿の外に舟が並べられ、12:15頃行事は終わる。この珍しい伝統行事がいつから始まったかは定かではないが、いまま明石の風物詩として多くの人で賑わっている。祭りの終わった後、青年として昔「おしゃたか舟」を投げて泳いだ氏子総代の一人が、「昔は投げてぶつけ合った。壊れた舟が拝殿に残されている」と思い出を力強く語られていたのが印象的でした。

【参考文献等】『明石の文化財』(2019. 3 明石市の文化遺産総合活用推進事業実行委員会)、『今はむかし、伝説紀行』(2004.7 日新信用金庫)、『播磨の祭り』(1999. 11 神戸新聞総合出版センター)、明石市役所ホームページ等

